

研究発表

ペットの世話が人に及ぼす影響

— JGSS2017/2018 統合データの解析より —

本村光江*

大阪経済大学

The Impact of Pet Care on Human Well-being: An Analysis of the Integrated JGSS 2017/2018 Data

MOTOMURA Mitsue*

Osaka University of Economics

【背景と目的】

ペットが人間の心身に及ぼす影響については、多くの研究成果が蓄積されてきた。たとえば、犬の飼育が精神的健康を高めるという報告 (Ikeuchi et al., 2021) がある一方で、単なる飼育の有無ではなく、ペットに対する愛着 (杉田, 2003; Teo & Thomas, 2019)、ペットとの情緒的一体感 (安藤, 2008)、および世話の程度 (星ほか, 2018) といった要因が、心身の幸福や健康に影響を与えるとの指摘もある。しかしながら、多くの研究は犬や猫の飼い主を対象としており、それ以外のペットを含めた研究は少ない (Scorseby et al., 2021)。そこで本研究では、犬、猫、その他のペットの世話および世話にかかる時間が、人々の生活満足度や幸福度に影響を与えるかを明らかにすることを目的とした。

【方法】

大阪商業大学 JGSS 研究センターが実施した調査のうち、ペットに関する設問が含まれている JGSS2017/18 統合データを用いて二次分析を行った。このデータは、満 20 歳以上 89 歳以下の男女を対象に、全国の市町村を 6 つの地域と 4 つの市郡規模に層化した 2 段階無作為抽出を行い、2017 年と 2018 年に実施された面接・留置調査の結果を統合したものである。

分析にあたっては、全体データおよびペット飼育者のみを抽出したデータを用い、それぞれ生活満足度および幸福度を応答変数、犬・猫・その他のペットの世

話および世話時間を予測変数として重回帰分析を行った。統制変数として、安藤 (2008) を参考に、性別、年齢、配偶者の有無、就業状況、独居の有無、教育歴、世帯年収、健康状態を投入した。

ペットの世話の有無は、「あなたが世話 (食事、トイレの始末、散歩など) をしているペットはどれですか」との設問に対し、「犬 (室外)・犬 (室内)・猫 (室外)・猫 (室内)・その他・いずれも世話していない」の選択肢から複数回答された結果をもとに判定した。分析対象を明確にするため、2 種以上のペットを世話している回答者を除外し、犬 (室外+室内)、猫 (同)、その他のペットの世話をしている人をそれぞれ 1 とするダミー変数を作成した。世話時間については、20 分以上を 1 とするダミー変数とした。有意水準は 5% とした。

生活満足度は、「住んでいる地域」「余暇の過ごし方」「家庭生活」「家計の状態」「友人関係」「健康状態」の 6 項目について、5 点満点 (満足) から 1 点 (不満足) までの合計点 (最大 30 点) とした。幸福度は、「あなたは現在幸せですか」という設問に対し、5 点 (幸せ) から 1 点 (不幸せ) までの連続変数で評価した。

【結果】

有効回答者 2660 人 (回収率 54.7%) のうち、ペット飼育者 (複数種の飼育を含む) は 743 人で、飼育率は 27.9% であった。

重回帰分析の結果は以下の通りである。

* 連絡先: motomura@osaka-ue.ac.jp

- ① 生活満足度(全体データ):犬($B = -0.08$, $p = 0.766$), 猫($B = -0.37$, $p = 0.299$), その他($B = 0.48$, $p = 0.339$), 世話時間($B = -0.17$, $p = 0.490$), いずれも有意ではなかった。
- ② 生活満足度(ペット飼育者のみ):犬($B = -0.004$, $p = 0.992$), 猫($B = -0.46$, $p = 0.288$), その他($B = 0.57$, $p = 0.306$), 世話時間($B = -0.26$, $p = 0.491$), いずれも有意ではなかった。
- ③ 幸福度(全体データ):犬($B = -0.06$, $p = 0.307$), 猫($B = -0.10$, $p = 0.226$), その他($B = 0.21$, $p = 0.055$), 世話時間($B = -0.10$, $p = 0.082$)はいずれも5%水準では有意でなかったが, その他と世話時間については10%水準では有意となる傾向があった。
- ④ 幸福度(ペット飼育者のみ):犬($B = -0.07$, $p = 0.436$), 猫($B = -0.09$, $p = 0.361$), 世話時間($B = -0.15$, $p = 0.076$)はいずれも5%水準では有意でなかったが, その他の世話($B = 0.25$, $p = 0.040$)は有意であった。

【考察】

ペットの飼育率27.9%は, 2001年に実施されたJGSS2001における飼育率37.1%(杉田, 2003)から約10ポイントの減少である。ペット飼育率の減少は, ペットフード協会の調査結果とも一致しており, 今後の飼育意向が2013年から2022年の10年間で, 犬では25.4%から17.1%へ, 猫では15.8%から13.8%へとすべての世代で減少していることが示されている。

生活満足度については, 全体・飼育者のみのいずれのデータにおいても, 犬・猫・その他の世話および世話時間の影響は確認されなかった。つまり, ペットの世話は本調査で測定された6項目による生活満足度を高めるとは言えなかった。

一方, 幸福度に関しては, 飼育者のみのデータにおいて, 犬・猫以外のペットを世話することが0.25ポイントの上昇に寄与することが示唆された。全体データでも, 10%水準では有意となり, 同様の傾向が確

認された。また, 世話時間についても10%水準では有意であったが, 回帰係数がわずかながらマイナスであり, 世話に時間がかかるほど幸福度が低下する傾向があった。犬・猫以外のペット(魚類, 鳥類, 小型哺乳類など)は, 比較的世話に手間がかからないとされており, その点が幸福度向上に寄与している可能性がある。

本調査では, JGSS2001(杉田, 2003)や安藤(2008)で用いられたペットへの愛着度などの指標が含まれておらず, 先行研究との直接的比較は難しいが, 犬・猫以外のペットの世話が幸福度に影響するという結果は, ペットとの関わり方に対する人々の意識の変化を示している可能性がある。

【謝辞】

日本版 General Social Surveys (JGSS) は, 大阪商業大学 JGSS 研究センター(文部科学大臣認定日本版総合的社会調査共同研究拠点)が, 大阪商業大学の支援を得て実施している研究プロジェクトである。JGSS-2017/2018 は, 文部科学省「特色ある共同研究拠点の整備の推進事業 機能強化支援」と JSPS 科研費 JP17H01007 の助成を受け, 京都大学大学院教育学研究科教育社会学講座の協力を得て実施した。データの整備は, JSPS 人文学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業 JPJS00218077184 の支援を得た。二次分析に当たり, JGSS データダウンロードシステムで個票データの提供を受けた。

【利益相反】

本研究に関して開示すべき利益相反はない。

【主な引用文献】

- 安藤孝敏(2008)「ペットとの情緒的交流が高齢者の精神的健康に及ぼす影響」横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅲ(社会科学)No.10
- 杉田陽出(2002)「犬の飼育と犬に対する愛着度が飼い主の身体的健康と精神的けんこうに及ぼす効果—JGSS-2001のデータから—」JGSS 研究論文集 [2], p.127-143.